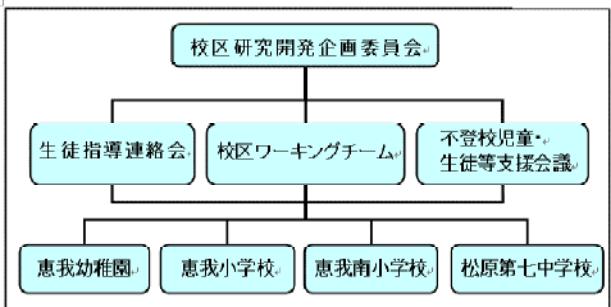


研究開発の内容

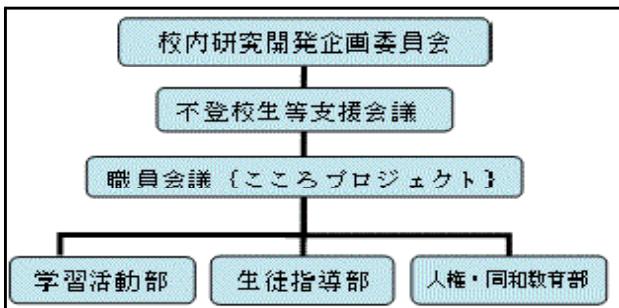
1. 研究組織

1) 松原七中校区



組織の要は、校区研究開発企画委員会である。ここで、研究計画や研究内容等を企画、立案を行っている。校区で子どもを育てるという目的で、6年前に立ち上げた「校区連絡会」が発展した組織である。各校では、「校内研究開発企画委員会」を発足し、取組を進めている。校区のプログラムづくりのための「校区あいあいプロジェクト」を発展させ「プログラムワーキング」「効果測定ワーキング」「実態把握ワーキング（報告冊子づくりも担当）」の三つのワーキングチームに再編成しなおした。不登校児童・生徒支援は、「校区不登校児童・生徒等支援会議」で、また、子どもの実態交流や進路等については、「生徒指導連絡会」で論議し、取組を進めている。

2) 松原市立松原第七中学校

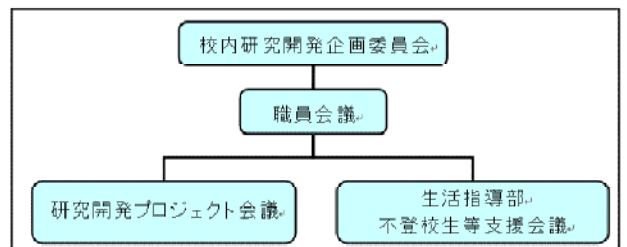


松原七中では校内に研究開発主任・教務・こども支援コーディネーター・人権同和教育担当・生徒指導担当・学年代表・各学年より1名・情報教育担当・事務職員からなる校内研究開発企画委員会を設置し、研究開発の中核を担い、校区連携の窓口としている。不登校生支援については、管理職・こども支援コーディネーター・生徒指導担当・養護教諭・人権同和教育担当・スクールカウンセラー・研究主任・教育アドバイザー・学年代表による「不登校生等支援会議」（週1回）を設置し、研究推進の中核組織としている。また、全教職員で人間関係学科の推進、不登校生への支援に

ついて検討する「こころプロジェクト」（職員会議内に位置づけて）を月1回実施している。

さらに、運営指導委員会や松原市不登校児童・生徒総合支援会議、松原市教育支援センター（チャレンジルーム）等の学外関係組織との連携も強めている。

3) 松原市立恵我小学校

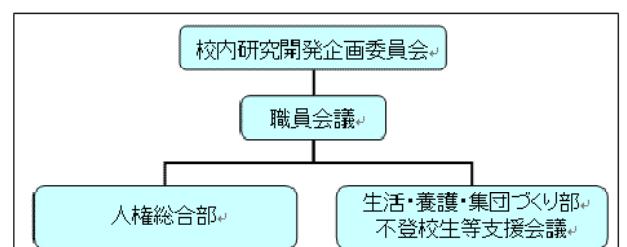


恵我小では、管理職と研究担当、人権教育担当、教務、校内プロジェクトとチームリーダーからなる校内研究開発企画委員会を設置し、研究体制の確立や校区の連携・調整の中心を担っている。

校内プロジェクトチームは「授業づくり」「データ分析」「実態把握」の3つからなり、校区のそれぞれのワーキングチームに対応しながら、校内でプログラム開発、効果測定、不登校生等を中心とした気になる子どもの情報共有を行っている。

不登校及び長欠児童の支援については、月1回の生活指導部会において子どもの実態を交流し、さらに校内不登校生等支援会議において、子どもと担任への支援について検討している。

4) 松原市立恵我南小学校



恵我南小では、研究主任、教務、人権・同和教育担当、生徒指導担当、各学年より代表1名、情報教育担当、事務職員からなる校内研究開発企画委員会が、校区連携や研究開発の中心を担っている。また、人権総合部を中心に、「校区プログラムワーキング」と連携し、プログラムづくりを進め、また、校内授業研究や校内研修を企画運営している。

不登校及び長欠児童の支援については、月1回

の生活・養護・集団づくり部において子どもたちの実態を把握し、さらに校内不登校生等支援会議では、管理職、生指部長、人権・同和教育担当、養護教諭、研究主任、学年教員、スクールカウンセラーで構成し、支援のあり方を検討している。これらは、全て職員会議において、確認し、共通認識をはかることとしている。

2. 教育課程の編成

恵我小学校・恵我南小学校

	各教科の授業時数											道徳	特別活動	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生徒会	音楽	図画工作	家庭	体育							
第1学年	272		114		102	68	68			90	34	34				782
第2学年	280		155		105	70	70			90	35	35				840
第3学年	235	70	150	70		60	60			90	35	35	70 -35	35		910
第4学年	235	85	150	90		60	60			90	35	35	70 -35	35		945
第5学年	180	90	150	95		50	50	60	90	90	35	35	75 -35	35		945
第6学年	175	100	150	95		50	50	55	90	90	35	35	75 -35	35		945
計	1377	345	869	350	207	358	358	115	540	209	209	290 -140	140		4548	

小学校の「人間関係学科」の授業時数は、第3学年～第6年においては、「総合的な学習の時間」のうち、年間35時間を充てている。なお、第1・2学年は、教育課程を変更せず、特活の時間内で15時間程度実施している。

松原第七中学校

	各教科の授業時数											道徳	特別活動	選択教科	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語								
第1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0	65 -35	35		980	
第2学年	105	105	105	105	35	35	80	70	105	35	35	70	50 -35	35		880	
第3学年	105	85	105	80	35	35	90	85	105	35	35	140	60 -35	35		980	
計	350	295	315	290	115	115	90	175	315	105	105	210	175 -105	105		2940	

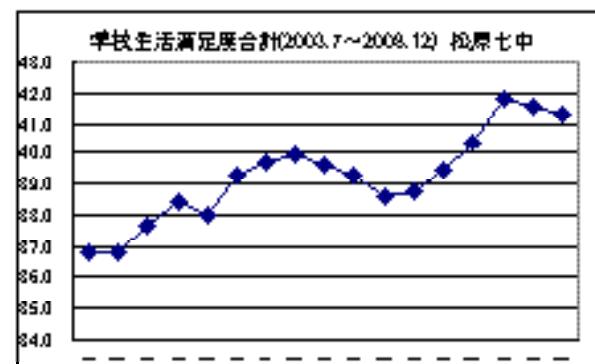
中学校の「人間関係学科」の授業時数は、「総合的な学習の時間」から特設した35時間である。

3. 子どもの実態から

1) 松原第七中学校

人間関係学科（HRS）導入後

松原七中では、2003年度から2005年度の3年間、文科省の研究開発の指定を受け、人間関係学科（HRS）の創設を行った。初年度から始めた「学校生活調査」を通じて、子どもたちは大きなストレスを抱え、それが子どもたちの日常生活に大きな影響を与えていることがわかった。私たちは子どもたちがストレスについて正しく学び、理解することが、ストレスと上手につき合い、良好な人間関係をつくることができるための第一歩だと考えた。



さらに二年目は、子どもたちが自分の良さを発見できず、自信を持てずに悩んでいる姿から、自己肯定感に注目して研究を進めていった。その結果、自己肯定感を高めていく要素は、

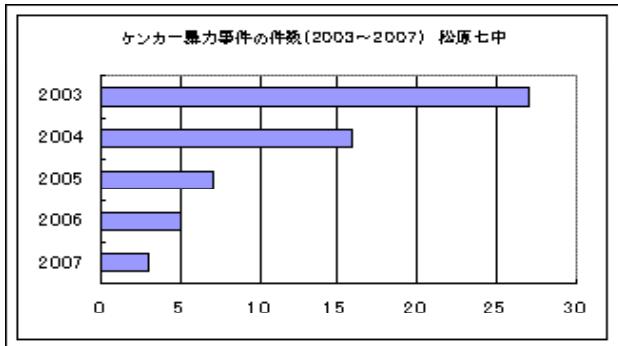
- ・ほっとできる居場所をつくる力をつける
- ・人との関係を築く力をつける
- ・自分の良さを発見できる力をつける
- ・家庭との連携をはかる

ということであった。

そして、三年目の最も大きな課題は、ストレスをマネジメントし、自己肯定感を高めていくための、人間関係学科（HRS）の完全開発（年35時間×3年分）であった。プログラムの開発にあたっては、自己肯定感だけではなく、自分と社会

とのつながりを意識していくための社会的有用感を育てることをめざしてきた。

その結果、子どもたちにおける学校生活満足度（楽しさ度）の上昇・不登校率の減少・ケンカの減少などが見られた。これは、「人間関係学科（HRS）の内容がよくわかった」と答えている子どもが90%近く、さらには「人間関係学科（HRS）で考えが広がった」と答えている子どもが80%にものぼっている事実（2008年12月HRS自己評価より）からも、人間関係学科（HRS）の成果であると言える。



今回の研究開発においては、この成果をより確かなものにしていくために、校区としての研究開発に取り組み、幼小中11年間を通じて、人間関係づくりを進めることである。義務教育の最終段階としての中学校で、社会的有用感をはじめとした「社会の中で人々とかかわりをもち、社会をつくっていく力」をどう子どもたちの中につくっていくかということを研究開発の中心課題として進めている。

2003年度から今年にかけて6年間、各学期末に学校生活調査を実施している。学校や家庭での生活における子どもたち自身についてのアンケートである。その内容は、

- ・ a 学校生活満足度（楽しさ度）
- ・ b 悩み
- ・ c ストレス反応
- ・ d ストレス対処
- ・ e ストレッサー
- ・ f 自己肯定感

に関するものである。前回の研究開発において、これら6つの領域に関わるアンケート結果をデータ集積し、様々な観点から分析していくことにより、子どもたちの実態を把握してきた。そして、そこから出てきた子どもたちの課題に応じた人間関係学科（HRS）のプログラムを子どもたちに提供し、各授業のふりかえりにおいては「ふりか

えりシート」を、各学期のまとめにおいては「HRS自己評価」を実施し、子どもたちの成長と課題を確認してきたのである。本年度を研究開発6年目と位置づけ、これまで取り組んできたアンケート調査によるデータ集積・効果測定を継続発展させ、今回の研究開発の柱としていきたいと考えている。

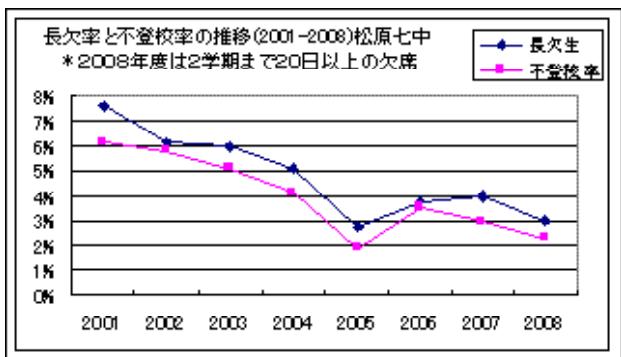
いじめ・不登校の状況

2006年度、いじめの深刻な実態が全国的に明らかにされた。これまでの「自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」という定義は、いじめの被害を受けた子どもに寄り添う視点から、「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」という定義に変更された。また、発生件数調査から、認知件数の調査に変更された。本校では、これを見て、被害を受けた子どもの立場に立って、「認知」そして「取組」を、という視点で、子どもの状況把握をより詳細につかもうと努力した。大阪府教育委員会の「いじめ防止プログラム」を参考にして、昨年10月には校内で「ほっとアンケート」を実施した。また、週1回の「不登校生等支援会議」で日常の子どもの様子から、いじめによる被害を受けていないか、交流を行っている。

「毛虫」の投げ合いの中で潰れた毛虫が体操服について「におい下さい」とはやしたてられ、悔しくて泣いた子どもがいた。鏡の前で髪の毛を触っていた姿をクラスの子から「なんで？」問いつめられ、教室を飛び出した子どももいた。本校では、これらの事例をいじめの事例と認識し、保護者へ学校の姿勢を話し、子どもたちへの指導・支援を行った。

「調査のための調査でなく、取組のための調査（大阪樟蔭女子大学学長 森田洋司氏）」と指摘されるように、子どもたちの集団の病理に対して、日常生活の中で正義感、公平感を養い、対応の中で強く信頼関係を築き、そうしながら、学校の中で相談機能を整備していく取組を進めている。そして、日常の生徒指導のなかで、厳しい状況に置かれた子どもを「困った子ども」ではなく、「困っている子ども」であるという意識の転換と支援という視点で取り組もうと共通認識している。

一方、不登校生等の実態については、不登校率が6%以上であった2001年度から、2%台になった2008年度にかけては長欠率・不登校率



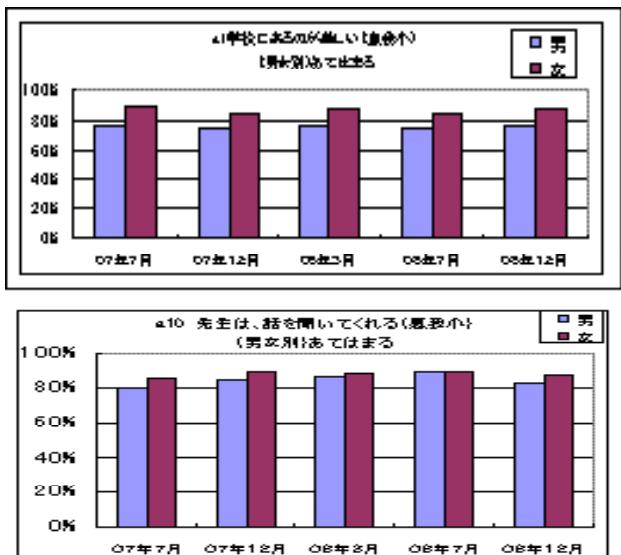
ともに減少傾向である。「学校を休む」子どもは、依然として存在する。「不登校」だけでなく、「病気」による長期欠席する子どももわずかであるがいる。

本校の調査では、欠席日数と学力（テストの成績）は、明確な相関がある。長期欠席や不登校の子どもたちが、中学校卒業後の進路選択において、「学力」が身についていないための狭められた選択を強いられていることは、明らかである。不登校に基づく、学力格差から将来の社会的な格差につながる可能性は極めて高い。不登校の未然防止と不登校からの復帰は、「格差」「差別」の再生産という循環を断ち切る重大な課題であると考えている。

2) 恵我小学校

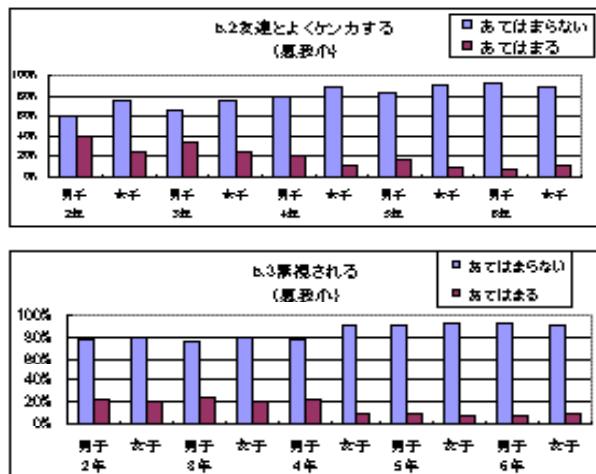
学校生活調査より

a) 学校生活満足度（楽しさ度）

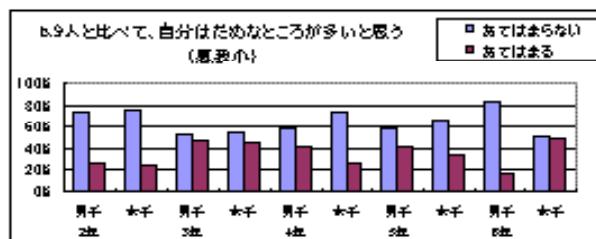


上のグラフは、2007年7月から2008年12月までの推移を表したものである。「a1 学校に来るのが楽しい」と感じている子どもはいずれも80%前後いる。「学校が楽しくない」と答えた子どもを個別に見ると、「先生にほめられたことがない」「休

み時間は友達と楽しく過ごせていない」と感じている子が多いことがわかった。教員の声かけのしかたや良好な友だち関係を築くことの大切さを改めて感じた。一方、「a10 先生は話を聞いてくれる」と感じている子どもも80%以上いる。今後もあいあいタイムに取り組む中で、子どもとしっかり向かい合う姿勢を大切にしていきたい。



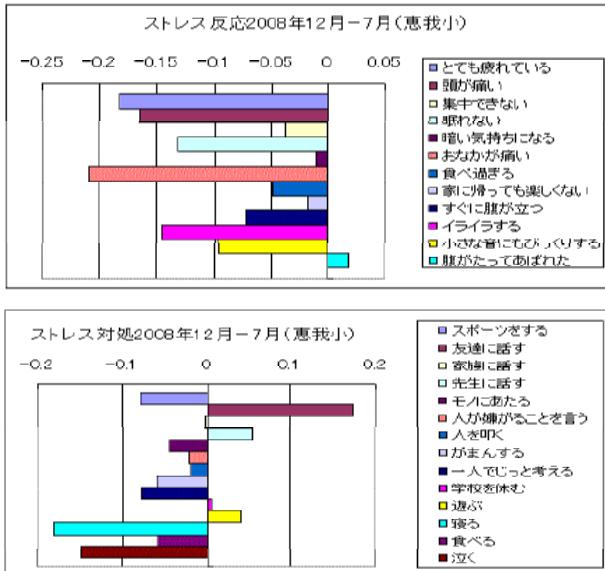
b) 悩み・ストレス対処



「b2 友達とよくケンカする」「b3 無視される」など友だち関係における悩みは、高学年になるにつれて減少している。子どもたちは成長する中で友だちづきあいが上手になっていると考えられる反面、特定の気の合う友だちとの関わりのなかで生活していることも原因ではないかと考えられる。6年女子では、「e4 友だちのことでイライラしている」と答える子どもが40%おり、どの学年よりも多い。表面は上手に付き合えるが、自分の気持ちを伝えられず、抱え込むことが多い様子が伺われる。

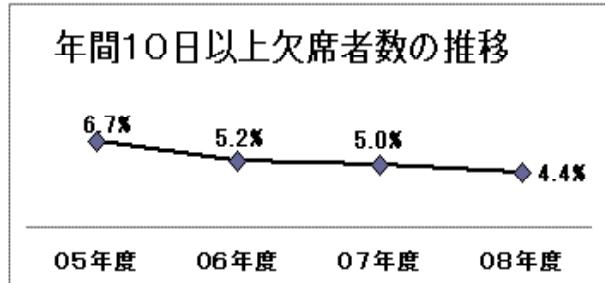
また、6年女子では「b9 人と比べて自分はだめなところが多いと思う」と答える子どもが半数近くおり、男子との差は30ポイント以上もある。不安定な友だち関係が自己肯定感の低下につながっていると言える。安心して自分を出せる友だち、ありのままの自分を受け入れてくれる人間関係をつくっていくことが自己肯定感の向上につながるだろう。

また、次頁のグラフは、今年7月と12月のストレス反応とストレス対処の差を表している。7月と比べ、ストレス反応は「c12 腹が立ってあはれた」



以外はすべて減少している。また、ストレス対処では「d2 友達に話す」「d4 先生に話す」などの積極的対処が増加していることがわかる。また、「b5 物にあたる」などの攻撃的対処や「b9 一人でじっと考える」などの抱え込み型対処が減っていることがわかった。どの学年もコミュニケーション力や対人関係のスキルを伸ばす活動を大切にしてきた成果であると言える。しかし、わずかながら「b10 学校を休む」と答える子どもが増加していることが気になる。その子たちは今のところ欠席日数が増加している傾向はないが、今後も個別に配慮し、生活背景や仲間関係を把握していきたい。

不登校児童の状況



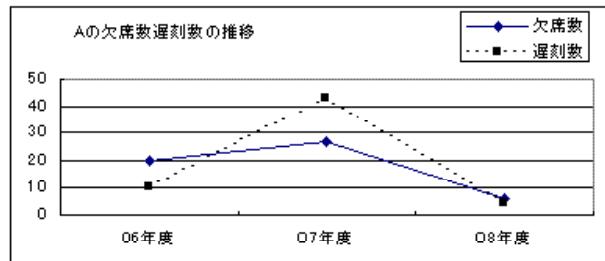
2006年度よりそれまでの30日以上欠席から欠席累積10日を目指して状況把握をおこなうことになり、遅刻の状況把握とも合わせて子どもたちへのケアやアプローチがより細かに行われるようになった。2006年度より追跡調査している子どもの中で、昨年度も10日を越えたものは54%もいた。しかも3年生以上については、半数以上が10日以上欠席を2度以上経験している。10日以上欠席する子の多くは、それ以前の年度でも10日以上欠席することが多い実態が見受けられるので、これらの子どもについては特に留意

して状況をつかむことが必要である。欠席理由の迅速な把握と当該の子どもへの対応、また校内不登校支援会議での追跡調査と支援の充実を行っている。

年間10日以上欠席者の割合は年々減少傾向にある。(2008年度については12月末時点で7日以上欠席している割合とした)とりわけ、今まで10日以上欠席したことがある子どもについては欠席数が大きく減少している子どももあり、支援の成果が表れてきている。

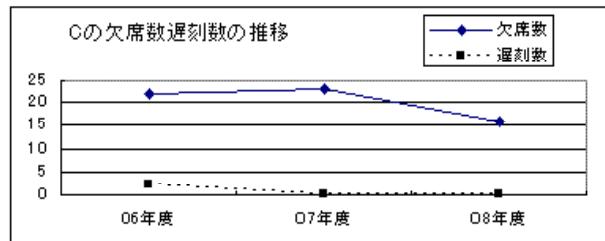
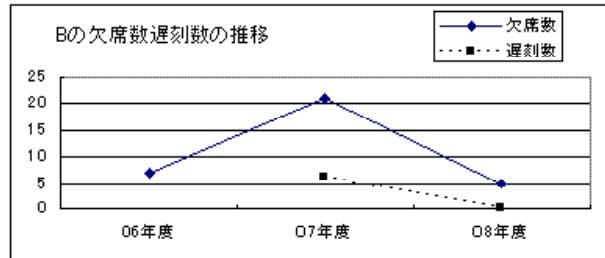
個別の子どもの実態として特に支援を必要とする3人の子どもについて記す。

Aについては兄弟の不登校の影響もあり、2006年度より欠席が増え始めた。家庭環境も複雑であり、また、勉強がわからないという不安も大きくなってきたことから欠席や遅刻しがちになってきた。担任からの誘いかけで途中から登校する場合もあった。



Bについては昨年度より気になる子どもとして状況の把握をおこなっている。昨年度学校に来るものの教室に入らずにいることがあった。Bも複雑な家庭環境のもとにあり、母親のことや家庭のことが子どもながらに気になっており、そのことを受け止めつつの支援が必要である。

Cについては、欠席が多かったものの遅刻もほ



とんどなく、理由が不確かな子どもの一人であったが、学年の友だち集団の人間関係での引っかか

りをもつことが少しずつわかってきた。おとなしい子どもで自分の気持ちをなかなか出すことができないだけに配慮を要する。

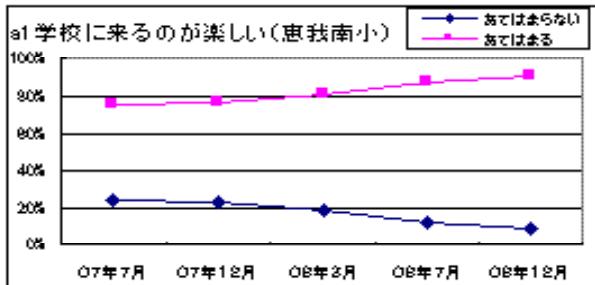
いじめの状況

現状では身体的あるいは金銭的な被害を伴ういじめについては見あたらない。ただし、特定の子に対して仲間はずしを起こしていたり、下校途中に相手が傷つく悪口を投げかけたりなど指導を行った事例もあった。お金がないと友だち関係を解消されることを恐れて、家のお金を持ち出しておごるなどの関係が表面化したケースもあった。「チクった」と睨んだり陰口を言うケースもあった。また、鉛筆等個人の持ち物をトイレに隠すなど物隠しや落書きもあった。どれも友だち関係の不安が背景にあり、根気よく気持ちを聞きながら取り組んでいくことが必要である。それとともに、力の強い者、偉そうに言う者に流されていく子どもの姿があり、どのように友だちとつきあっていくかが大きな課題である。

3) 恵我南小学校

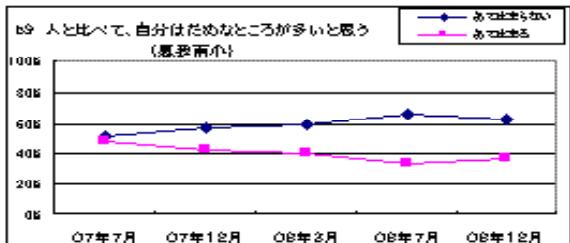
学校生活調査より

a) 学校生活満足度（楽しさ度）



全体の 90 % 程度の子どもが、「a1学校に来るのが楽しい」と感じている。前回から 5 % ほどの増加が見られる。また、子どもと教員の関係の数値では、良好な結果が表れている。子どもどうしの関係でもおおむね良好な数値を示している。

b) 悩み

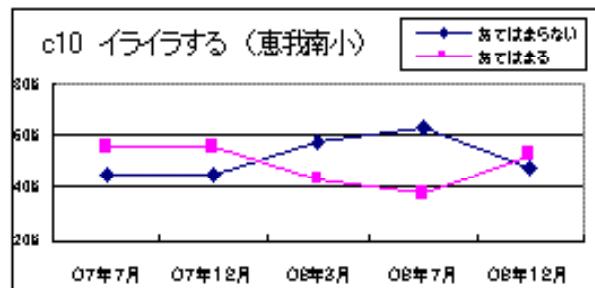


「b9人と比べて自分はだめなところが多いと思う」の項目では、約 40 % の子どもがあてはまる

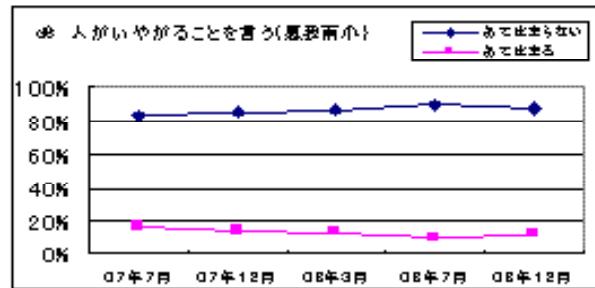
と答えている。自己肯定感を高める取組の成果が全体に浸透しているとはまだまだ言えず、取組内容の検討など含め今後の課題である。

c) ストレス反応

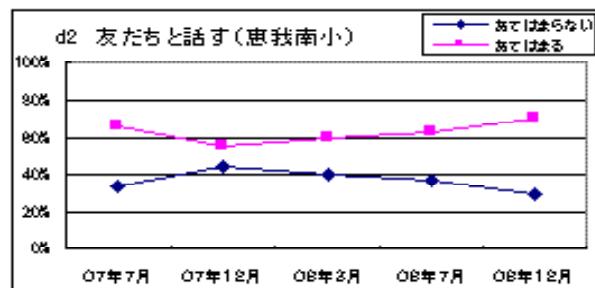
「c10イライラする」子どもが増加傾向にある。ストレスについて学ぶあいあいタイムに取組み始めストレスを自覚するようになった、また各学年学習や友だちとの関係が進むにつれてのイライラも増加したのではないかと考えられる。また、「c8家に帰っても楽しくない」項目の増加も、イライラの増加とのかかわりがあるように感じられ、実態を把握し原因を見極めることが大切である。



d) ストレス対処

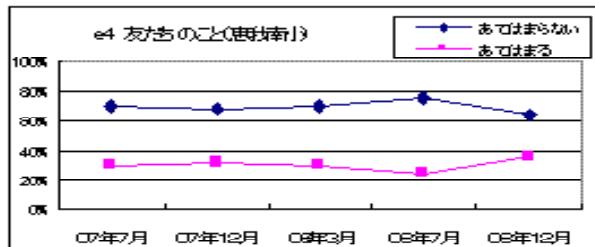


ストレスを感じたときに、「d6人がいやがることを言う」などの攻撃的なストレス対処は、90 パーセントの子どもがしていないと答えている。しかし「d2友だちと話す」などの積極的なストレス対処には増加が見られない。



ストレスとはどういったものなのか、どのようなときにストレスを感じるのか、ストレスを感じたときにどのように対処していくべきなのか、各学年で取り組み始めたところであり、今後の継続が必要である。

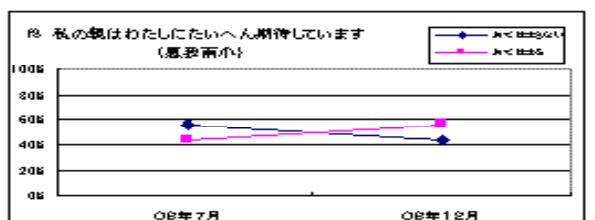
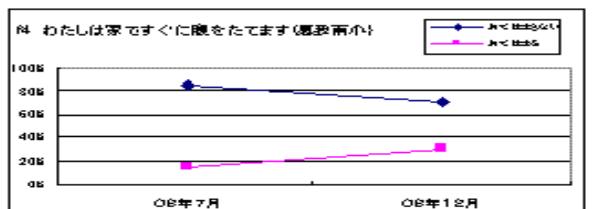
e) ストレッサー



イライラするという状況は変わらないかまたは微増が見られる。「e4友だちのこと」の項目で増加が見られ、ストレス反応の結果とも合致している。イライラする気持ちへの対処を引き続き学習し、実態の把握にも努める必要がある。

f) 自己肯定感

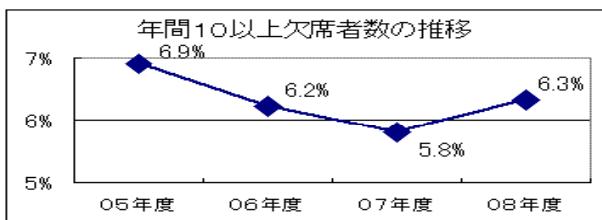
他の項目に比べ、「f4わたしは家ですぐに腹をたてます」「f8私の親はわたしにたいへん期待しています」の項目で、数値の変化が見られた。ストレス反応領域での「c8家にかえっても楽しくない」という項目とも関連しているように感じられ、家庭との連携も必要である。



不登校生等の現状

本校では2006年度以降、前年度の累積欠席日数が10日以上になる子どもの実態の把握に努めている。2006年度までの数年は、年間30日を超える長期欠席・不登校児童がいない状態が続いていた。しかし、2007年度は30日を超える子どもが2名いた。

下記のグラフは過去3年にわたる10日以上の欠席があった子どもの割合である。



今年度から前年度の欠席日数が10日以上の子どもを、全職員共通の理解のもとに実態を把握し、情報収集を継続して行っている。また不登校未然防止の観点から、遅刻の状況にも着目し欠席の有無に関係なく遅刻が多い子どもにも注意を向け、その実態把握と情報収集に努めている。また、前年度に10日以上の欠席がなくても、今年度当初に気になる状況にある子どもについては、同様に毎月の欠席・遅刻等の状況を把握し、生活状況や友だち関係を含めた支援のあり方を検討していくために、個々に個別シートを作成している。そして月に1回の支援会議を開き、学校での子どもの様子や家庭への働きかけなど、支援の取組や成果などについて確認している。昨年度10日以上の欠席のあった子どもの欠席状況については、1学期、2学期を通して欠席が無い子どももいて、安定をみせている。しかし、昨年度30日以上欠席した子どもについては、2学期以降に大きな崩れがあり、家庭への働きかけや諸機関の連携の必要性、そして子ども本人のがんばりにどうこたえていくかを改めて考えさせられた。

今年度当初、欠席しがちな子どもや、欠席・遅刻が目立って多くなってきていた子どもも、2学期以降落ち着きを見せてきていているが、今後も子どもたちを取り巻く状況や変化を見極め、個々の子どもたちの課題を把握し、支援していくなければならない。

いじめの現状

恵我南小の子どもたちは遊びが好きであり、素朴で純粋な子が多く、「子どもらしい子ども」が多い。一方で自分に自信がなく、仲間の目を気にしたり、仲間の中に自分の居場所が確保されていないことにより、仲間はずしや、誰かを陥れることでつながる関係も存在している。

事例としては、気に入らない子を棒でたたいたりというように直接的な表し方をする子もある。また、下駄箱においてある靴の中に砂を入れたり、無視をするなど、陰湿な出し方をする子もある。さらに、ひとりの子どもに対して命令して何かをさせ、身体的に苦痛をあたえるということもあった。また、命令するもの、周りではやし立てるもの、黙っているものと、まさにいじめの構造をかいだ見ることもできる。

いずれにしても、多くの子どもたちが健全な関係を築いている一方で、いじめが存在することを見逃すことはできない。

4. 人間関係学科の取組

1) 松原七中校区（取組の概説）

目標 めざす子ども像

人の思いを受けとめ、自分の思いを表現できる
子ども

自分を見つめ、自分で考えようとする子ども
人を信じ、人とつながろうとする子ども

（11年間で獲得させたいターゲットスキル）

	幼稚園	低学年	中学年	高学年	中学校
自己信頼	□	○	○	○	○
自己管理力	□	○	○	○	○
感情対処	□	○	○	○	○
コミュニケーション力	□	○	○	○	○
対人関係	□	○	○	○	○
ストレス対処	□	○	○	○	○
ピア・プレッシャーへの対抗	□		○	○	○
時間管理	□		△	○	○
境界設定	□		△	○	○
決断と問題解決	□		△	○	○
計画性	□			○	○
情報活用力	□			○	○

- ・「自分の長所や短所を正しく判断し、自分のことを受け容れることができる」（自己信頼）
- ・「自分の生活をコントロールできる」
(自己管理力)
- ・「怒りや悲しみなどの感情をコントロールできる」
(感情対処)
- ・「いろいろな人と適切に対話できるコミュニケーション力をもつ」(コミュニケーション力)
- ・「まわりの人と適切な関係を築くことができる」
(対人関係)
- ・「ストレスに対して適切に対処できる」
(ストレス対処)
- ・「仲間からの圧力に対して、自分の考えを伝え、行動することができる」
(ピア・プレッシャーへの対抗)
- ・「自分自身の時間を有効に活用できる」
(時間管理)
- ・「自分と他人の間に適切な距離を置き、自分らしさを表し、相手を尊重できる」(境界設定)
- ・「身のまわりに起きたことや、自分自身の課題に対して、自らが考え、取り組むことができる」

（決断と問題解決）

- ・先を見通し、計画的に課題をこなせる（計画性）
- ・まわりからの情報を積極的に取り入れ、物事に活用する
(情報活用力)

校区の取組

a) 2007年度

2006年度、大阪府の「子どもの未来ハートフル推進事業」の指定を受け、校区人権教育研究会で、松原七中校区の子どもたちの実態や課題を話し合い、子どもたちの現状や課題をふまえ、松原七中校区として『めざす子ども像』を設定した。その子ども像を実現していくための「人間関係づくりのための授業」づくりをめざして、「校区あいあいプロジェクト」を発足させた。その中で、左記の表のように、幼・小・中11年間で獲得させたい12項目のターゲットスキルを設定し、「あいプロ12のスキル」として校区のターゲットスキルとしたのである。2007年度、武庫川女子大学大学院・西井克泰教授、親和女子大学・新保真紀子准教授、マザー・アース・エデュケーション主宰・松木正氏を招聘した校区合同研修を実施し、幼・小・中の人間関係学科（あいあいタイム・HRS）の授業づくりを本格的に始動させた。また、地域への発信という観点で、七中校区地域教育協議会予算総会で幼小中合同の教員劇を披露した。

b) 2008年度

本年度（2008年度）は、幼・小・中の連携をさらに強めていく取組を進めてきた。

一つ目は、授業づくりにおける学校間連携の強化である。恵我小・恵我南小の合同協議の場を設けたり、松原七中も含めて授業交流を深めてきた。本年度の春の校区人研では、昨年度の秋の校区人研よりも公開クラスを増やすとともに、研究協議も強化し、現時点における校区の課題を確認してきた。武庫川女子大学大学院教授・西井克泰氏に継続的に関わっていただき、恵我小、恵我南小での研究協議や本年度春の校区人研教育研究会において貴重なご指摘や方向性の示唆をいただいた。2年目をむかえた「あいあいタイム」、6年目を



むかえた「HRS」の恵我幼も含めた11年間での発達段階に応じた授業づくりという段階に到達していることを確認した。

二つ目は、本年度の校区ワーキングの設置である。「あいあいプロジェクト」を発展させ、「校区プログラム・ワーキング」「校区効果測定ワーキング」「校区実態把握ワーキング（報告冊子づくりも担当）」を発足させた。校内ワーキングの成果を代表者が持ち寄り、校区としての方向性を提示することとしている。不登校生等の支援においては、各校の不登校生等支援の代表者による校区不登校生等支援担当者会議を月1回実施し、具体的な支援策の交流を行っている。校区での不登校生等支援をさらに進め、校区で一貫した不登校生等支援がされることをめざしている。

三つ目は、上記の課題を推し進めていくための校区合同研修にも引き続き取り組んできたことである。弁護士・峯本耕治氏からは「不登校生等支援に関わる事例の数々とアセスメント（見立て）の必要性」を、マザー・アース・エデュケーション主宰・松木正氏からは、『ワークショップの「こころ」 - 「寄り添うこと』』を、ひとまちファシリテーション工房代表・ちゃんせいこ氏からは、「ファシリテーションがうみだすエンパワメント」を学んできた。さらに、地域への発信として、本年度の松原七中校区地域教育協議会の予算総会では、昨年度の幼・小・中の教員劇から地域の人たちとの合同劇を取り組むまでになった。

c) 研究報告中間発表会の開催

そして、この校区での取組が大きく前進したのが11月14日に開催した研究報告中間発表会（2年次）であった。主催者を含め600名超（市外、府外からの参加約150名）の参加のもと、松原七中において、恵我幼稚園、恵我小学校、恵我南小学校、松原第七中学校の3校1園の9つの授業（各学年1、小中のコラボレーション授業1を含む）公開と全体会を行った。

公開授業については、恵我小・恵我南小の合同学年会議や、教員の交流授業を学校を越えて実施した。中でも、校園間のギャップを埋めるために、恵我南小6年生、松原七中1年生による中学生が小学生を歓迎するという形でのコラボレーション授業や、恵我幼稚園の授業に松原七中2年生がファシリテーションリーダーとして子どもの援助に入るというような取組を行った。実施に向けては、数多くの打合せを持ち、本番に備えた。参観された皆様からは、貴重なご意見をたくさんいただき、授業づくりにいかしている。

また、松原七中のボランティア活動の一環として、ガイドボランティアを募集し、中学生たちが

参加者の皆さんや園児・児童の子どもたちを案内誘導する係として活躍し中学生の有用感を高めさせてもらった。地域教育協議会の方々には、早朝から準備や、参加者の方々のための軽食や飲み物販売の協力をしていただいた。

全体会では、文部科学省初等中等教育局児童生徒課 生徒指導室生徒指導企画係長 須原愛記氏による全体講演、松原七中校区教員によるプレゼンテーション、武庫川女子大学大学院 西井克泰教授、大阪府教育委員会 古川知子氏、松原七中校区地域教育協議会会长 前田正人氏、松原七中教員の4者によるシンポジウムに取り組んだ。

d) 外部への発信や外部との交流

これまでの研究成果をまとめる一方、これから新たに人間関係づくりに取り組んでいこうとしておられる教員の方々の松原七中校区への訪問や、様々な研究会、学習会への出張ワークや講演にも従来どおり力を注いだ。（研究の経緯の項参照）さらに、本年度から校区研究開発のホームページを立ちあげた。

<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/>

08koukukenpatsu/koukuhyoushi.htm

このHP作成を通じて、全国の人間関係づくりの授業に関わる方々との交流も進み、多くのことを学ぶことができたばかりではなく、本校校区の研究開発の課題達成に向けて大きく前進したと言える。



公開授業を参観されている方々



全体講演
文科省 須原氏



シンポジウム

2) 松原第七中学校

目標

松原七中では、2003年度から2005年度までの研究開発において、世界保健機構(WHO)のライフスキルを基礎にして人間関係学科(HRS)のプログラム開発を行ってきた。一つひとつのワークにターゲットスキルを定め、明確に獲得目標を設定した。そして複数の授業からなるパッケージ方式をとり、子どもの状況や実態に応じて臨機応変にパッケージの入れ替えて対応できるようにした。

ストレス対処から自己肯定感の育成へと進んでいった流れを引き継ぎ、今回の研究開発においては、人間関係学科(HRS)を中心とした教育活動を通じて、子どもたちに社会的有用感をいかに身につけさせていくかということが課題となっている。校内の生徒会活動、地域のボランティア活動、保育所・幼稚園・小学校の子どもたちとのブリッジ等、自己肯定感の獲得から社会的有用感の獲得へつなぐことができるプログラム開発、カリキュラムづくりが、子どもたちの成長から要求されているといえる。

今回の研究開発の目標設定において、これまでのWHOの10個のライフスキルを、更に『高次の、様々な文脈を通じて通用しうる「ジェネリックスキル』(2006年5月大阪府ハートフル推進事業連絡協議会における大阪樟蔭女子大学学長、森田洋司氏の講演より)として設定し、これまでのプログラムの再編成、ターゲットスキルの読替作業を進めていく段階に入っている。本年度は、ターゲットスキルの高次化への移行期間としてとらえ、従来設定してきたWHOのライフスキルを基礎としたプログラムをもとに、ジェネリックスキルを基礎とした授業をどう関係づけて取り入れていくかということを、その理解とともに進めてきた。次の表は、WHOの10個のライフスキルとジェネリックスキルを関係づけたものである。

WHO ライフスキル	ジェネリックスキル
自己認識 共感性	自己信頼 自己管理力
対人関係スキル	対人関係 境界設定 ピア・プレッシャーへの対抗
効果的コミュニケーション	コミュニケーション力
意志決定 問題解決力	決断と問題解決
ストレスへの対処	ストレス対処

情動への対処	感情対処
創造的思考	
批判的思考	
	時間管理
	計画性
	情報活用力

内容

a) 自己開示(自己認識と共感性)



「わたしのじゃがいも」

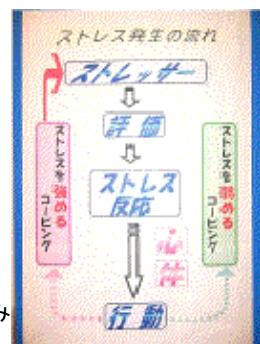


「すごろくトーキング」

b) ストレスマネジメント



「パニックゲーム」と



ストレスの仕組み

c) 対人関係・感情対処



「トラストアップ」



「人文字大作戦」

d) ルールづくり・人間関係の調整



「松原第七団地を救え！」



「ディベートゲーム」

* 流れと実施内容は、巻末の資料にあります

3) 恵我小学校・恵我南小学校

あいあいタイムの取組

小学校では、松原七中の取組に学びながら、「あいあいタイム」のプログラム開発を行ってきた。中学校同様、子どもの状況や実態から出発し、一つひとつのワークにターゲットスキルを定め、複数のワークからなるパッケージ方式をとっている。

a) 4つの「あい」

あいあいタイムの「あい」は、

[1]人を愛する（大切にする）の「愛」

[2]自分を大切にする「工」

[3]相手（周りの人）を大切にする「相」

[4]助け合い・支え合いの「合い」

という4つの「あい」と位置づけ、あいあいタイムの授業の始めに、子どもたちと確認してから授業を始めている。

b) ソーシャルスキルトレーニング

小学校では、主に低学年を中心に、対人関係・コミュニケーションスキルをターゲットスキルとした、対人関係スキルのワークを系統立てて実施する方向で、取組を進めている。その内容は下記の通りである。

ソーシャルスキルトレーニング（小学校）

低学年	あいさつ・自己紹介 相手の話を聞く 仲間の誘い方、入り方
中学年	あいさつ・自己紹介 温かい言葉かけ 気持ちを分かった働きかけ
高学年	あいさつ・自己紹介 優しい頼み方、断り方

c) 自己肯定感の育成

小学校でも、中学校同様、自己肯定感の育成が、大きな課題となってきた。自己肯定感の育成には、自分を好きになる、自分に自信を持つとともに、まわりの人たちに認めてもらう、まわりの人たちを好きになることが重要である。そこで、全学年が特にクラス替えのある1学期に、自分や友だちのいいところ探しを中心としたワークに取り組んでいる。

d) ストレスマネジメント

小学校でも、様々なストレスを感じ、それをう

まく対処できない子がいることから、特に中学年以上で感情対処・ストレス対処の授業の必要性が出てきている。そこで、下記のような流れで系統立てて取り組んでいるところである。

3年	感情に気づく イライラのコントロール
4年	イライラのもとを知る 気持ちを落ち着かせる方法を知る
5年	ストレスとは何かを知る ストレスの対処法を知る
6年	ストレスの構造とその流れを理解する ストレスの対処法を知る

e) 出会いと気づきを大切にしたグループワーク

高学年になると、時間管理、決断と問題解決、計画性、情報活用力などのターゲットスキルをねらいとした授業にも、取り組んでいる。その際、小グループで、一体感・達成感を持たせながら、子どもたちの気づきを大切する。また、それをして出し合う中で、ねらいを共有できることを大切にするなど、ほぼ中学校に近い形で授業を行っている。

f) シェアリングを大切に

特にこの間論議されてきたのは、子どもたちのふり返りをどうシェアリングさせるかということである。ひとつは、ふり返りをワーク実施後できるだけ早いうちに写真も含めて掲示物にして、教室に貼るようにしている。それだけでなく、より深い気づきを導くように、中間シェアリングを設けたり、その場の意見を少し出させてから、ふり返りシートに書かせたり、全員発言をめざしたり、状況に応じて様々な方法に取り組んでいる。

g) 楽しいと実感できるワークショップに

「あいあいタイムは楽しくて何か発見がある」と子どもたちに感じさせたい。そのために、様々な知恵を絞っている。教員の登場の仕方、興味を引く場の設定、教材教具等…。そして、教員も一緒に楽しんで取り組むことを大切にしている。

* 実施内容は、巻末の資料にあります。

5. いじめ未然防止・不登校生支援の取組

1) 松原第七中学校

いじめ防止の取組

昨年度実施した「ほっとアンケート」を、本年度は更に発展させ、いじめの状況のみならず、生活度、承認度、効力感を測定する「新ほっとアンケート」を作成し9月に実施した。その結果をもとに毎年行っている担任と子どもによる二者懇談を1週間かけて実施した。子どもの心の状況や友人関係などについて困っていることや悩んでいることを話題にした。3年生は進路選択・決定の不安などを聞き、自分の将来についてのアドバイス等を担任は行った。1・2年生では、学校生活での友だち関係などが主なテーマであった。また、家庭学習の方法など、様々な観点から子どもたちへの支援を行った。即時対応が可能な、学期半ばでのアンケート調査は、子どもと教員の距離が縮まり、つながっていける有効な手段であったと言える。

不登校生への支援

不登校生への取組について話し合う会議として、2003年度から週1回の不登校生等支援会議、月1回の全体会議（こころプロジェクト）を設置した。これらの会議は、不登校生への取組にしぼった話し合いをする会議であるが、これ以外でも、『不登校は人権課題であり、進路の課題である』という共通認識のもと、学習活動部会、人権・同和教育部会、生徒指導部会の3つの専門部会でもそれぞれの観点から不登校生らへの支援について話し合うことにした。さらに、不登校生が学級復帰に至る過程での居場所として、不登校生のための部屋=「ほっとスペース」を設置し、家庭と学校を結ぶ拠点として位置づけた。

以下、不登校生への取組を詳述していく。

a) 不登校生等支援会議（週1回）

構 成

研究主任、子ども支援コーディネーター、生徒指導主事、教務担当、人権・同和教育担当、養護教諭、学年代表、スクールカウンセラー、管理職、教育アドバイザー

役 割

- ・不登校生の現状と課題の把握
- ・『こころプロジェクト』の企画・運営
- ・関係諸機関との連携

- ・不登校未然防止と復帰のマニュアルづくり
- ・研修
- ・不登校生への具体的取組
 - 『ほっとスペース』活用、学習支援、体験活動
- ・不登校生ケース会議
- ・松原市不登校児童生徒等総合支援会議との連携
- ・松原市要保護児童対策地域協議会

今まで学級・学年単位で取り組まれていた不登校生の支援を、学校全体で考えていくための会議として位置づける。毎週1回、欠席の多い子どもたち一人ひとりについて、状況を交流しながら、学校復帰にむけての手立てや関係諸機関との連携などを検討し、学校全体に不登校生や配慮を必要とする子どもたちにかかわる課題を提起する会議として活動を進める。

b) こころプロジェクト（月1回 職員会議の中で）

構 成

教職員全員

[人間関係学科の開発にむけて]

- ・子どもたちの実態分析
- ・人間関係学科のカリキュラム作成
- ・各学年の人間関係学科の交流
- ・多様な学習方法の研究・研修と試行
- ・子どもが相談しやすい環境づくり

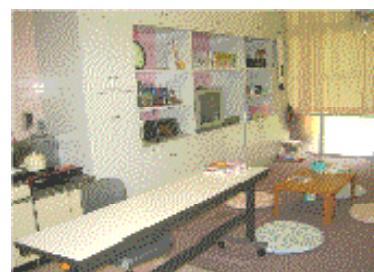
[不登校生への体験・学習支援にむけて]

- ・不登校生の現状と課題の交流
- ・不登校生への支援体制づくり
- ・ほっとスペースの運用の研究
- ・保護者支援
- ・欠席がちな子どもの早期発見、早期対応

不登校生等支援会議からの提起を受け、学校全体で不登校生一人ひとりについて論議する会議である。不登校生の状況を全員で確認することで、不登校生の課題を共通認識する。

また、各学年の人間関係学科の交流も行っており、学校全体として不登校の未然防止と支援を考える場とする。

c) ほっとスペースでの取組



ほっとスペースとは
・不登校状態で、家にこもりがちな子どもたちが登校した時に学習できる部屋

- ・子どもたち一人ひとりに応じた学習を支援する部屋
- ・引きこもり傾向にある不登校生が、ほっとして学習や体験活動ができる部屋
- ・研究主任が運営面での原案を出し、不登校生等支援会議で検討し、運営していく

ほっとスペースのあり方

- ・本人の様子と気持ちを第一に
- ・当面、他の子どもたちとの接触は避ける
カーテンを閉める
不登校生の在室時は室内から施錠できる
教員が入室する場合は、ノックして名前を伝えてから
- ・どんな学習をするかは、本人と相談しながら
- ・子どもたちが選択して取り組めるように、多様な教材を準備しておく
情報機器（PC、スキャナー、プリンター）
テレビ、ビデオ
調理器具類、ゲーム類、パズル類
- ・担当は
研究主任、養護教諭、生徒指導主事
学年教員、スクールカウンセラー
スクールソーシャルワーカー 等々

d) 2003年度から2005年度の取組から
本校での学校復帰をめざした「不登校生への支援」を取組から以下のように総括した。

[1]学校の変化を

意識の変化 「対策」「支援」
人権教育としての不登校児童生徒の支援
アセスメント（見極め・見立て）
「病気による欠席」へのメス
不登校児童生徒への取組が学校教育全体への見直しへつながる

[2]広がりと深まりを

担任 学年・学校
学校 小・中の連携、関係諸機関（松原市子育て支援課・子ども家庭センター・少年サポートセンター等）
校内不登校生等支援会議 組織の整備

不登校の課題は、人権課題であり、進路の課題であること
原因追及ではなく支援へ
欠席・遅刻等の出席状況のデータを蓄積して状況分析を
チームで対応 = 複数のサポート

保護者への支援

校内不登校生等支援会議の重要性
校区小学校や関係諸機関との支援ネットワーク
累積欠席日数10日を契機とした取組
長期休業中の取組
自己肯定感、社会的有用感を育てる

A 小中の連携の深化へ…未然防止は早期発見
欠席10～30日の子どもに焦点をあてた引き継ぎ

「あそび・非行型」の子どものきょうだい関係
校区の小中の合同支援会議の実施（年2回
3学期と夏休み）

B 未然防止！ そのために
子どもが来たくなる学校こそ、最大の未然
防止・・・受容的・人権を尊重する学校
集団づくりの再生へ
早期発見早期対応は未然防止のポイント
欠席理由の明確でない子の把握を

C 保護者のソーシャルサポート

いじめ・不登校の未然防止に関連して (生徒会がよびかけるボランティア活動)

a) 仮説設定として

昨年度の研究開発を通じて、いじめ・不登校の未然防止に対しては、市民性教育（シチズンシップ教育）などを通じて、人間関係を調整していく力を育てることが必要であることを学んだ。〔2007年11月18日、日本生徒指導学会における大阪樟蔭女子大学学長・日本生徒指導学会会長、森田洋司氏の講演より〕そして、そんな力を育てていくためには、手法としてディベートやボランティアの活動が有効であるということを知った。

不登校生の未然防止にむけては、子どもどうしが受容と共に包まれた居場所づくりを促進していく場づくりをになう子どもたちを育てる。いじめの未然防止にむけては、これに加えて、いじめの4層構造（前述、森田洋司氏による）における「仲裁者」の役割を果たせる子どもを育てる。「仲裁者」が増えていけば、それに比例していじめが減っていくということである。これまでの人間関係学科の取組を通じて育ってきたアサーティブな子どもに、市民性教育で言われている人間関係調整力をさらに身につけさせることで、「仲裁者」という役割を果たせる子どもになっていくのでは

ないかという仮説設定をした。

仲裁者 = アサーティブな人間関係調整力を身につけた子ども

これまで松原七中校区地域教育協議会が提起してきたボランティア活動に加え、本年度からは校内で子どもによる課題提起という形で、生徒会がよびかけるボランティア活動に取り組んできている。

b) 松原七中生徒会の取組

松原七中生徒会では、生徒会本部役員や各専門委員会（学年・生活環境・保健体育・文化図書）を中心として、あいさつ運動や地域の幼児・児童との交流の場づくり（夏の「涼もう会」・冬の「HOT × ほっと会」）などを行ってきた。



「涼もう会」



「HOT × ほっと会」

しかし、そうした活動の中で、従来から、二つの反省点があった。一つは、生徒会活動が、本部役員や各専門委員会だけのものになっていること。もう一つは、行事中心の活動になってしまい、子どもが主体的に何かを創っていくことがあまりできていなかつたことである。

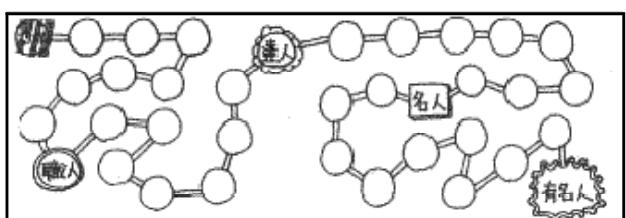
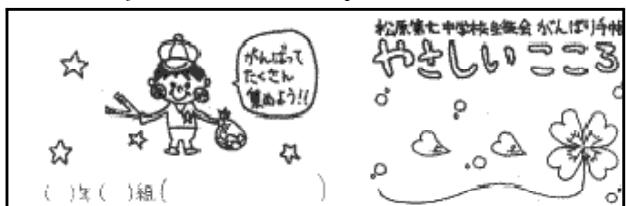
また、中学校生活の中で、生徒会活動などの自主活動の面から学ぶことも多い。生徒会活動をもっとうまく活用できれば、子どもたちが成功体験や達成感をより多く味わうことができ、それが自己肯定感や自己効力感や社会的有用感を高めることになる。ひいては、それがいじめの未然防止につながっていくのではないかという思いがあった。

以上のことから、昨年度、生徒会アンケートをとるなどして、七中生徒会が七中生全員のものであるという意識づけを行った。従来の行事中心の生徒会から、生徒のアイデアが活かせる生徒会にしていくことをめざしてきた。その結果、昨年度の学校教育自己診断では、「生徒会活動への参加」に関するポイントが、少しだが上昇した。ただし、「生徒会活動は学級委員などの専門委員会の活動」という意識を払拭するまでは至らなかった。

そこで、今年度、新たな試みとして、生徒会のボランティア活動をつくっていくことにした。生徒会本部役員や専門委員が呼びかけて、協力して

くれる生徒を募るという形で行っている。

「七中生全員が七中生徒会のメンバー」「生徒会はみんなのためのもの」という意識を七中生全員に広げるため、すでにいくつかの生徒会ボランティア活動を実施しており、多数の子どもたちの参加があった。活動へのモチベーションも高い。また、今年度新たにデザインや名称などを募集してつくった「生徒会がんばり手帳～やさしいこころ～」に、生徒会ボランティア活動をしてスタンプをためていくことに喜びと達成感を感じているようである。このような活動を継続的・定期的にできるようにしていきたい。



（「生徒会がんばり手帳～やさしいこころ～」）

また、前述の夏の「涼もう会」、冬の「HOT × ほっと会」は、PTAや地域教育協議会の協力を得ながら行っている。さらに、松原七中校区国際文化フェスタは、生徒会本部やボランティアスタッフが参加して、地域の大人と一緒にチャリティーバザーや模擬店を出している。教員以外の地域の大人から、褒められたり認められたりする。これも自己肯定感や自己効力感や社会的有用感を高めていくことになる。さらに、こうした経験をした子どもたちが将来、地域の大人として、地域の子どもたちを育てる原動力になっていくと考えられる。そうしたあたたかい地域をつくっていきたい。



2) 恵我小学校

いじめへの対応

a) 情報の調査・共有

毎月の行動調査をおこない、子どもたちから気になる出来事や問題行動の聞き取り調査を行い把握に努めている。そこでのことをもとに毎月の生活指導部会（各学年1名+で構成）で論議を行っている。重要なことについては随時職員会議で報告を行うが、学期に1回子どもの実態交流会として各学年から生活指導上の事例検討会や学習会をおこなっている。

また、子どもの実態をつかむ取り組みが大切である。具体的には継続的な日記指導を続けることによって、子どもの気持ちの変化に気づくことが多い。また保護者との密接な連携の中で子どもの気になる姿や地域での人間関係での参考になる話を教えてもらったこともあった。子どもたちとの関係づくりと保護者との関係づくりが問われている。

b) 子どもへの指導

子どもたちの中に力関係でつながった事例や金銭に関わった関係でのつながりの事象が見られた。そのような事例を把握したときには、当事者の話し合いの中で、つらい気持ちにある子どもの気持ちを相手に響かせること、そしてそのような関係は友だちを傷つけていることに気付かせることを大切にした。また、学年集会等をもち、学年全体への指導とともに、自分の気持ちをみんなの前で伝えていくということを支援してきた。子ども自らが立ち上がる子どものエンパワーや引き出せる指導を充実させていきたい。

不登校生への支援

a) 情報の共有

校内不登校児童支援会議の中で、それまでに名前が挙がった児童については継続して追跡調査を続け、個別の児童の状況を共有化している。情報の共有は主に3つの場面で行っている。1つは校内不登校児童等支援会議である。これは管理職、養護教諭、対象児童の担任、生活指導部からの不登校対策班の教員、そしてこの中にあてはまらない学年があった場合はその学年より1名の参加で構成されている。個別の子どもへの関わりをふりかえり、一人ひとりの子どもへの今後の大きな方針を確認する場としている。2つ目は子どもの実態把握のための校内プロジェクトである。これは学年1名+の教員で構成され、毎月1回おこな

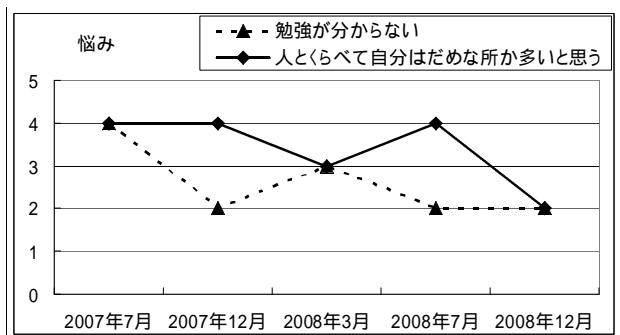
っている。学校生活アンケートやあいあいタイムの振り返り等や学年からの状況報告をもとに子どもたちの現状についての見立てを共有している。これは支援会議での方針への材料ともなっていく。3つ目は生活指導部である。これも各学年1名+で構成し、毎月おこなっている。ここでは各個人の欠席状況を確認し、学年や学校への注意喚起を主におこなっている。

b) 関係諸機関との連携

その中で深刻な状況については、家庭ぐるみの支援が必要であり、子育て支援課や子ども家庭センターなど関係諸機関との連携を重視し取り組みを進めている。「子どもの実態から」の項で前述したAについても複雑な家庭環境があり、学校だけでなく子育て支援課も入っての家庭ぐるみの支援をしてきた。

c) 不登校生等への対応

Aについては欠席が増えることによって学習があくれることへの不安が本人の中にもあることから、担任による誘いかけをしてきた。そのことを継続していくことを確認した。今年度については2学期終了時点で、欠席数6日・遅刻数4日とがんばっている状況にある。少人数担当による学力不安へのフォローとともに教師との関係づくりや友だちとの関係づくりを心がけている。

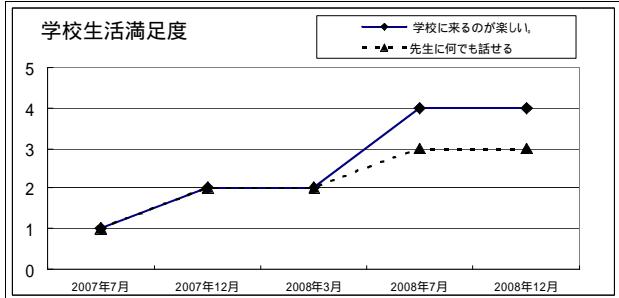


学校生活アンケートの回答から、勉強とともに自分への自信が高まってきていることがうかがえる。

Bについては昨年度教職員で声かけをしても自分の気持ちを言あうとせず「かたまってしまう」事があったので、まず本人が行ける所などへ促すことと担任をはじめ学年の先生に話しかけをしてもらう事を行ってきた。今年度については欠席数2日・遅刻数0回とよくなっている。ただし、家庭環境はむしろ複雑になっており、母親の仕事の関係で学校へ送ってくることが増えたことにより支えられている状況といえる。学校生活アンケー

トでも満足度の数値は学年の中でも極端に低く、またストレッサーの数値も極端に高いことから、日常のBの変化をすばやくキャッチし、共有化していくことが求められている。

Cについては、引っ掛かりとなっていた人間関係のことで学年集会をもちCに自分の気持ちを出させることを支援してきた。そのことで若干の好転が見られていた。ただし、今年度については2学期終了時で欠席数が16日になっており、今後もCの気持ちに寄り添い理解していくことが求められる。



Cについてはこれまでの教師のこの子らの気持ちに寄り添い理解しようとする関わりが成果となって、学校生活アンケートでの教師との関係の項目で今までの結果に比べて好転した。

3) 恵我南小学校

いじめ未然防止・不登校生等支援の取組

いじめ・不登校ともにその未然防止や支援を行う上で、特に次の4点を意識した取組を行った。

a) 情報・意識の共有

いじめや、不登校は瞬発的に発生するというよりも長年にわたり積もったストレスや感情が表面化することに伴って発生するケースが多いと考えられる。いじめ、不登校の事象はどの子どもにも起こりうることと教員が認識し、職員会議、各部会を通して情報の収集と共有化を行い、教員全員の目ですべての子どもを見ていくという意識を持つことを大切にしている。また、子どもの数が比較的少ない点から、情報の共有化がしやすいことも恵我南小の特徴である。

b) 支援組織の充実と対象の明確化

いじめ・不登校の傾向が強い子どもを支援するための校内不登校生等支援会議を設置している。

いじめについては、いじめを認知したときの指導方法の検討や、未然防止の方法、事象をすばやく把握するための方策、児童会との連携による全校集会や啓発週間などの実施を目的とし、「生活

・養護・集団づくり部」の中で論議を進めている。不登校に関しては、今年度より不登校生等支援会議を定例で開催している。支援の対象となる子どもは、昨年度、累積欠席数が10日以上の子ども、今年度中に欠席が10日に達した子どもとした。また、遅刻に関しては8時30分に教員が教室に入った時点で登校していないものを遅刻とし、遅刻の回数も含めて、不登校生等支援会議で話し合うことを確認した。

対象者の明確化によって、教員はその子どもをさらに意識し、見ていくようになった。このように、不登校生等支援会議を中心とした支援体制づくりに取り組んでいる。

c) 支援の具体化

対象の子どもについては、現状・生活実態・成果などを書き込んでいくカルテをもとに話し合いを行い、現状の報告、これまでの支援と取組の確認、今後の支援策の方針化を行っている。

子どもに対する支援

具体的には日常の教員とのコミュニケーション、その子が自分の悩みを話すことができる友達関係をつくる手助け、クラス全体の仲間づくりを通じて子どもが「行きたい」「いても安心できる」という場と人間関係の構築をめざしていく。

保護者への支援

不登校には、子ども自身による人間関係やクラスでの立場などをその原因としているものだけでなく、保護者と子どもとの関係や生活環境にその原因が由来する例も少なくない。保護者自身もストレスや悩みを抱えていることを理解し、それを受けとめ、解決していくための支援を行う。例えば担任教員や管理職が保護者の悩みや話を聞くことで気持ちを出させること、ケースによってはスクールカウンセラーや関係諸機関へつないでいくことが支援として必要である。

学校組織として

いじめや不登校は突然に起こるのではなく、長期にわたってのストレスや感情が積もった形の表れとも考えられる。その時、担任が「自分のクラスで起こったこと」と問題を抱え込むのではなく、組織として問題に対応していきたい。また、経験の少なさから、保護者や子どもにどのように接していくことが支援となるのか悩んでいる教員も少なくない。担任が責任を持って問題事象に対応することは大切なことであるが、全体の問題として位置づけ、担任個人が抱え込むのではなく、校内体制として支援を行っていくために、これら

の会議が存在している。

d) 経過の確認と校区連携

毎月の支援会議における報告において、会議までの期間で具体的に行なった取組を報告する。また、その情報を校区不登校生等支援担当者会議として各校の担当者で現状の情報交換を頻繁に行なっている。きょうだい関係の把握だけでなく、小学校時代の様子などをふまえた対策を講じていくことで、これらの問題をクラス、学校の問題とするのではなく校区全体の課題として意識し取り組むことができたと感じている。

6. 保護者・地域・関係諸機関とのネットワーク

保護者との連携

松原七中校区では、学校園・保護者・地域・関係諸機関とのネットワークを大切にしながら教育活動を進めている。教職員・保護者・地域の人たちが協働して地域の取組をつくり上げ、子どもたちの成長を見守っていることは大きな地域の教育力となっている。そして地域で生活している大人たちが、子どもを見守り、活動の場をつくり、頑張っている姿をみつけて、ほめてもらえるような広がりができつつある。日常の行事をはじめ、地域の行事にも保護者として積極的に参加し、運営にも関わっていただいている。子どもたちの活動する様子を見守り、交流する中で、保護者同士のネットワークも広がっている。また、年間何度か行われる授業参観の中でも、人間関係学科の授業を参観し、時には保護者同士で授業を体験するなど、子どもたちの成長のために学校と連携している。様々な学校や地域の取組については、毎年「学校教育自己診断」等のアンケートで保護者の意見を知ることで、より良い教育活動を進めるために活用している。

松原七中校区地域教育協議会との連携

松原七中校区地域教育協議会(以下地域協)は、2000年度に立ち上げられた。もともとの松原七中校区青少年健全育成協議会(以下、育成協)からの活動を引き継ぎながら、学校教育への支援・子育て支援の取組を強くしてきた。地域協に関わっている地域の人たちで、子どもの頑張りをほめていこう、大人がみんなで見守っていることを伝えいこう、そのために、子どもたちの活動の場所をつくろうと、年間を通して様々な活動を行っている。

松原七中校区国際文化フェスタ

地域協の行事の中で一番大きなものが、松原七中校区国際文化フェスタである。1995年度、当時の育成協に集う諸団体が、松原七中校区の国際理解と交流を深め、地域ネットワークづくりを目的として始めたもので、現在松原市内全中学校区で行われている校区フェスタの中でも一番早く



スタートをきったのが松原七中校区である。校区の保育所・幼稚園、小学校・中学校やそのPTAはもちろんのこと、地域の町会や子育てに

関わる団体が一堂に会して行われる「地域連携のシンボル」のようなイベントとなっている。保育所や幼稚園、小学校の子どもたちにとってはそれぞれの取組の大きな発表の場となっている。また、中学生にとっては、スタッフとして地域の大人たちと一緒に活動する機会にもなっており、フェスタに参加する団体は、例年50団体をこえ、参加者も5000人を超える大きな地域の祭りとなっている。そして、そのフェスタを企画・準備する過程も、各学校園の教職員・PTAと地域の人たちのネットワークづくりのための貴重な場であり、子どもたちにとっても保育所・幼稚園から小学校・中学校、さらに卒業生も含めた縦の交流ができる場となっている。

その他の行事

- ・クリーンキャンペーン(校区の清掃活動:年3回)
- ・スポーツ交流大会(小学校合同のスポーツ大会、中学生が大会運営のお手伝いのボランティア、本年度は七中のグランドを開放し開催)
- ・いきいきハイク(小学校合同の遠足)
- ・子育て講座(関係諸機関等から講師に来ていたり、子育てに関わる講演会)

上記のように、地域のために子どもたちが役に立つような行事や、子ども同士や子どもと



地域の大人との交流を目的とした行事、子育て支

援の活動が行われている。また、地域協のネットワークの中には、中学校の「職場体験学習」の受け入れ先としても協力してくれている事業所がある。また、松原七中の生徒会行事の「涼もう会」や「HOT×ほっと会」にPTAと共に協力をに行っており、子どもたちからも地域のいろんな大人たちが関わってくれている様子が見える場面が多い。日常の地域協役員会の場では、毎回各校園での子どもたちの様子を交流する時間をとっており、「子どもの顔が見える活動」ができるようになってきた。また、地域協の役員経験者が地域協の幹事として役員に残ることで、これまで培ってきたネットワークづくりと活動内容を引き継いできている。

そんな中、昨年度は地域協の全役員が集う予算総会の場で、松原七中校区の幼・小・中の教職員が一緒になって、ロールプレイ（劇）で各校園の取組みを紹介した。これは校区で進めている人間関係学科（あいあいタイム・HRS）の内容を地域の方々に理解してもらい、校区の取組を知って



もううきっかけとなった。

さらに、今年度は校区の教職員と地域協の役員が共演し、今後の取組に対する決意を地域に向けて発信することができた。毎年の劇の内容は学校での気になるできごとやもめごと、そして家庭で日常的に交わされている

会話や、悩みなどから題材を選び脚本にまとめ、それらの問題を解決していく過程での気づきや学びこそ大切であることを少なからず伝えることができた。

今後、この取組を校区で共有し、積み重ねていくことはかなり大変なことである。各校園の教職員が悩みながらも協力し、楽しみながらつくり上げてきている姿を見ていただけたからこそ、子どもたちの成長や今後の活動に力を貸していただける確信を得ることができた。

地域協予算総会でのロールプレイ（劇）

両小学校の土曜日の取組との連携

両小学校区には、土曜日の取組を中心に進める「放課後・土曜子ども体験活動推進事業」として、恵我小では「遊・遊土曜日」、恵我南小では、「エガナンサタデー」が取り組まれている。ここにも、各校区の町会や松原市の青少年指導委員や体育指導員、そして地域の諸団体が日常の土曜日の子どもの居場所づくりを担ってくれている。

関係諸機関との連携

- ・スクールカウンセラー

児童・生徒や保護者のカウンセリングの場として小学校は月に1回、中学校は毎週、巡回しカウンセリングを行っている。

- ・松原市教育支援センター（チャレンジルーム）

学校以外の居場所づくりとして、松原青少年会館に開設、担当者が派遣されている。

- ・松原市子育て支援課

配慮の必要な家庭や子どもについて、継続的に連絡を取りながらサポートしている。

- ・富田林子ども家庭センター

ここ数年間に数件の具体的な事例について連携してきた。

- ・富田林少年サポートセンター

小学校高学年について「非行防止教室」を開催してもらっている。

- ・松原警察署生活安全課少年係

児童・生徒の生活指導の担当者との日常的な連携や、地域協での防犯教室など、情報交換を行っている。

- ・松原第7保育所・ピヨピヨ保育園

松原七校区中フェスタや学校行事への参加など、交流する場が定着してきた。

このように、松原七中校区には、各学校園、地域、関係諸機関による横のつながりと、保育所・幼稚園・小学校・中学校という縦のつながりがある。このネットワークの中で、子どもたちの成長をさまざまな角度から支援し、さらに相互のつながりを深めることを大切にしながら活動が進められている。



地域協ボウリング大会